和漢三才図会 二

伊地知文庫
文庫20
315
2

文庫
315
2

西園寺抄

千載集

前一三六帝上

春の夜の朧月の梅をよめる月春

ひろもとの朝臣

十首帝人よよませたりける時春の

帝とそしるあり

見ぬ時は花の香りをたづねつる

うしの声をきくにはなれぬるかな

前三夜帝

摂政右大臣の時の哥合に郭公の
哥とてよめる

すきぬるか夜半の寐さめの郭公
こゑハ枕にある心ちして

夜此哥の中にて
きこゆれハくものうへうちさしあり
しかうきまさるかすまのうらん
月とて物しくやハあかぬ月と
みそきにまつ夜乃くまなれ

第四 秋哥上

八重むくらしけれるやとのさひしきに
いかにか秋乃あくさきりけん
夕されハ野への秋風身にしみて
うつらなく也深草のさと
ゐてくるおかたのおくふかすみて
きよくこさ川本すめる月かけ

第五 秋哥下

あきふくるむかし百首哥よみ侍る
時忠乃哥とてよミ侍ける
さゝめくと聲ハ人もしの音色

よのなかはめくる秋乃くまぞかれ
秋の心をよめる
藤原定家
志ぐれゆくものの梢乃色よりも
秋ハ中々の物あはれなり
貞六 冬部
冬きては一よ二よ夜と夜さ乃
菊のけの露乃ところせきまで
崇徳院に百首奉らせ給ひける時
落葉の心をよめる

夜さむなる志本の板屋にあれて
夫ね志くれやこの葉なるらん
西住法師くにすゝめて百首よませ
侍ける時に時雨乃心をよめる
志ぐれ法がまやの杉端の雅ぞれたり
やうやうさしける月のかけられ
月をよみ侍る
すゝ夜乃関ありあけの空にたえぬ
かゝる月は今ほとゝぎす
月さゆる川のいとりみえぬらん

第七 謝別辛

百首辛

第八 羇旅辛

第十 賀辛

第十一

同歌よ百そあまりこゝ侍りける時ち
めくる恋のこゝろをこゝ侍りける
ちもすがらこゝろもそのかつらやま
いかるもち神いかつしはらこん
ちあり恋
いうにきんしろの八幡よ宿をそれ
恋乃くもりをそうまこん
建十二 恋二
はるひさやちのそうこかきつめて
百神くおすしまろよりんとは

建十三 恋三
法性寺殿しそ人月侍見時をのこ
ゝ色平こゝ侍りける時 契は深恋
といつるんをこゝ侍りける
角はめこゝ野をの花芝 恋ちう
いつこまるこん
ちはるかすよ世こ乃ちをすりうや
ちこのさやのありあをの色
建十四 恋四
恋氏のこゝ侍りける乃平よ 民恋

あまつあめはひとよ為をやくらん

按察右大臣の所歌乃方合よ恋のこ

とこゝろかゝる

あふすいの為をくくもまつくさよ

世ををへるこゝろんはとそかきしさ

第十八 恋五

はるこしのいたくさめさのうきぬ縄

ふるさと恋ふよ行くれくん

あきしのゝ家くまさへぬるこゝも

こひいらちをあはまゝありもるか

恋歌

ちゝうちゝ聖うち中もかちうゝ

この世ゝ人をたのゝこゝるかうれ

第十六 新古今

秋の月とのゝるゝ人成ゝこゝ行ける

すゝもひく為をくくさ山里よ

あまちとゝうさ月のうけうか

殷富門院ゝ人ゝ百首中ゝ

行ゝ秋ゝ月乃ゝゝゝうゝ

いたゝんさゝてうゝさ世いたゝくさまん

今めかし月もまことに落なり
二条院の御時四代まで絵合すること
をおもひてよめるか
いまれハ志らくありつまにもえくく
よく乃ま井の月をなかめん
其十七　新亭中
遁世乃後花乃亭にてよめるか
世のうへ乃春しるそさくよまするねは
花に梅もおもひ出しを
花さらに法躰るに海りて

金堂のおもての額かきを見てく
よみ侍るか
ちりまさかりしきをきゝくさいて花
ちりのまちきとも乃里とはみよ
西行法師みすめける百首のうち
此中に花の亭とてよめる
花さかり風もさそ世をうらむまし
よしのく花も数なり
述懐の百首此中に落此亭
とくにありか

うちとゝ為ものたるうちとゝ
このようにはなくるゆやなけうん
座像の旨肩に付うゝ仰けるとゝ
廉乃寺にてゝある
世にはすゝよりたゝそるけまゝ
ふゝ乃わくゝもゝ廉そなくゝ
今ゝ乃四仏付ゝ乃祖仏定歟
あやまちあるゝ阪よゝきゝ
しゝゝゝゝ為ゝのゝれ仏けるゝ
の年ゝゝれるゝゝのゝゝ仏定

のゝゝのゝゝ仏ゝ院よゝゝゝゝ阪
ゝゝゝきゝ尼女弁宣出ゝ仏ゝ
ゝ仏ゝゝゝにゝゝゝ仏ゝ
ゝゝゝ乃ゝ仏ゝゝゝゝゝゝ
廉をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ十九 歟ゝ乃
法師ゝ淵尼淵土流ゝ定ゝ
乃ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

鈎殿のみ侍まゐりける
又よ花そ見る　くもしの山
清見むしろの　くもゐうつろふ
第二十　秋歌
いさつまは咲ける男を　鹿よしの
松吉さえしと　おもへ志なん
日吉社の歌の歌合の時月の
心をよめる
鴨川　みたらせの　岩波を
こほりをとくく　秋の夜の月

新勅撰和歌集第二
花と志らしくもの　あとしも　雪とみる
山さくら戸の　あきらけの　くもゐ
前関白家歌合によめる花を　いふ
心をよみ侍りける
右衛門督為家
うちのこし　梢もみえて　山さくら
むらさめに　かぜもかしこき
第三　夏歌

寛永元年書入屏風

久方の月の桂の木の葉にもかはらぬ色
を見るかな

寛永元年十一月書入屏風

ながめつるかな

右為門書

あらしふく山のもみぢの葉のうへに
あらしふく山のもみぢの葉のうへに

東四　秋部上

ながめつるかな

萩の上葉のあきのあさつゆ

養和の比は百首歌にいれる

秋部

あさつゆ

あさつゆ人のかもとのあさぢ
秋ぞ月の知るべなりける

仮家抜抜たるこゝろ四月
の末百首歌にいれる

あきの入秋の月のかたぶくを
とゝひの月の出しをぬしたれか

東四　秋部下

右衛門尉

右衛門尉

行く心乃日うけの雲乃むこうに
人こそきくらめ
弟十二 恵二
建保六年庚申 久恵と号
人をこそうらめ
恵一 ちはやぶる
あらしもあのよのかぜよさて
弟十三 恵三
うぬ人をまちうの浦乃波乃中ふきたて
やく藻しほ乃為もこうまぢ

月
うらのよハうらのうら史をそれとみよ
むろ乃やへ海を邪 きりねた
弟十五 恵四
建保六年内裏の合
あふ事をさきたちのあとあつまるわ
まきたちのうらこそみくまそあらん
恵十首 ふるのよ波乃
うまとも波あるまきこそふるよ波のそ
ふりくるものを波をたをもうれ

第十六 雜部一

元暦のころほひ賀茂重保入道の
千載の撰ばれ侍りし社頃の会し侍を
ふる月をながめて
ながめくらすやながつきぬひとの秋をとく
れなばとくるるとしの月の為
第十七 雜部二
花の咲年をむかしとなりて侍り
ふるさとにつかうまつりて
て和記のまちうたにまちて侍る

海辺の民乃家のうきものの
ちりぬるをあはれとおもふ
関白左大臣家百首に
晩春の心
百敷のうへ人を出るよりうら
まちぬれむ山乃端月
續後撰和歌集
第一 春歌上
建保二年
海辺をあるきて侍る時

江上美らし　泰綱卿

人とらく花さくやいとん　西津橋

ゆむ　つり　江乃美のあ　作の

建二年中

洞院摂政家百首　寄花恋

ゆくすゑ　乃　ゆ　山乃さくら　散乃　よ

ゆ　さくら　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

あくまで　咲　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

花ゆの　ゆ　ゆ

し　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

建四　寄月　ゆ

あ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

建六　秋月　ゆ

秋　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

建七　秋宵　ト

寛義元　寄人間屋風　義

高砂山まつのもらの文あなを
しらまねれ松乃文を見てたまき
建長二年九月詩合とおほくまき
御時山中松風
そめもせぬあへを志らくまこに白山
まつちをねさ空松のとそふく
第九 新撰六
入道前攝政家歌合に名所月
辛沿川新代乃晴久けとあらく
今もふるらぬ松乃秋の月

見しめゆくゑ播乃松村なりよなめ
萬や新代乃志るしあらん
大納言よまりて悟すに日吉社よ
まうでしよまを侍なる
雲らくの松や乃見なしにおおよこう
見ろおくまし を新やらくらん
第十 玉葉 一 忠良
嘉陵
志らまし家 以 気をつかなけくとを
いやくは見ゆる さひなるこゑ

第十二 雜部

[illegible]

第十三

[illegible]

第十四 雜部

[illegible]

以惠雲院殿御自筆本令
書写遍一校了